

もくじ

文化庁に注文する

文化政策について思うこと

文化行政長期懇談委員 川喜田二郎…2

文化財建造物保存のこの二百年

東京国立文化財研究所長 関野 克…4

国民生活の長期展望と文化の振興

経済企画庁国民生活局 長浜 元…6

文化庁とわたし

寺島アキ子…8

島と橋

藤浦 洸…9

美術をどう鑑賞したらいいだろう

国立国際美術館設立準備室長 本間正義…10

我が町、我が村の文化行政

三重県の文化行政……………12

福岡城の環境整備と美術館建設など……………13

各国の映画振興策

社団法人・映画文化協会 森本 暢…14

「オペラ研修所」の発足とその事業

オペラ研修所事務局長 河内正三…16

地方ニュース……………17

文化庁ニュース……………18

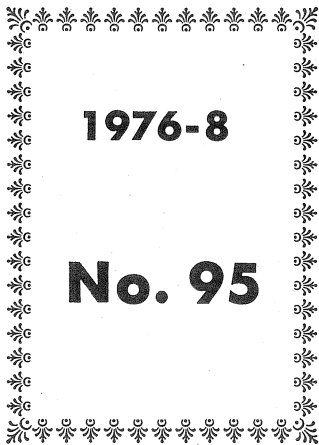
しおさい……………22

文化財保護法教室(4)

文化財の指定と選定(2)……………23

新刊紹介……………24

広告……………25



1976-8

No. 95

表紙：大官大寺出土 隅木の飾金具
(奈良国立文化財研究所発掘調査)

題字デザイン：桑山弥三郎

種々の徴候的データを見ると、これからは思索産業が発展するだろうと思われる。そのよってきたる背景は、難問続出時代に入ったことであり、これからの文明の難局は、一億総思索化によつて突破すべきと考える。

さて、文化施設についてであるが、戦後スタートした公民館の発展と比べて、図書館・博物館はいかにも弱い。その理由は、公民館は、単に見たり、聞いたりするだけでなく、自らやる(創造する)ということに結びついたものであり、そこでは、人々は連帯感を覚え、あるいはグループとしても個人としても活性化するからである。

これは、創造というものを通して、人と人、人と場所、人と物とが血のかよつたまとまりを持つこと、すなわち、創造を中心としていろいろなものが参画するということである。

このことから発展させていけば、物は一か所に集めなくても、元々あつたその場に置いたままで情報として集約する。すなわちオープンコミュニティアムという考え方もできるし、一芸一能をもつて協力しようという市民は大勢いるから人材プールもできる。それらを生かし、価値ある文化事業を参画的な方法で盛り上げることである。

結局、人でも物でも一か所に集めようとするよりは、技術的裏付けが必要であるが、高度な情報で事実上掌握されていけばよいという考え方が必要で

ある。

また、町づくりなどで民間レベルのボランティアの活動に対する役所の介入にはプラスに働いて大変良かった場合と、介入の結果せつかくのやる気がなくなつたマイナスの場合とがある。そのようなケースを洗つてどこがポイントか、をしぼり出すことが必要である。県からの単位の文化行政活動がこれからは必要である。国や県など、今後は、市民の参画に対して文化行政が激励するという方向が大切である。

文化政策について思うこと



川喜田 二郎
移動大学代表
川喜田研究所長
文化行政長期懇委

私の独断的意見では、組織には、三つのレベルがある。

すなわち、①規則、制度を作つて運営していくシステム・レベル。②人間関係の問題になる小グループ・レベル。③一番下のレベルでは個人に密着したものである。

現実には、下からの盛り上がりというものは個人ないしスモール・グループで何か始まる。上からの役所で決まつて降りてくる。その両方がうまく協力できるかという問題である。

文化政策の根本は、三つのレベル——組織レベルでうつつべき手、スモール・グループでうつつべき手、個人レベルでうつつべき手、例えば教育というふうな問題——そういうものを総合的に考えないとうまくいかない。

これを背景に究極には、どういう方向を狙うのか。現実の大きな問題は、我々の近代的な生活の中で一人の人間の人生は、会社、家庭、パチンコ屋へ入つた時と、ばらばらな細切れの様な感じである。また家庭も細切れ、近隣関

係も細切れである。

家庭や社会の中で細切れ生活を送っている人々の求めるものは、例えば、晴耕雨読のような心身とも全人生活、トータルな人生で、これが理想となるだろう。トータルな人生を求めて何をすればいいか。

まず一つには、人間がばらばらでなしに、やり取りができる広場の問題だ。新しい今後の時代にふさわしい広場はどういうデザインで作つたらいいか。社会の中に広場的なものがないため

に起こっている歪みは非常に多い。子供は極端に集団経験がへつている。広場を作つても利用する時間がなくて困る。時間のやり繰りが問題だ。時間と空間のデザインが必要なのである。

そのデザインの中には、人間が孤独でいる場所が一つ必要である。何となれば、孤独にもなりにくいのが現代の環境であるから。他方、人に触れ合うところは徹底的に触れ合う場所にすべきである。車を入れない場所と乗つて忙しく走り回る場所を使い分けて、全体をうまく使うことだ。

いうならば、ハードウェアとソフトウェアとさらにはウォーミングアップとか研修ないし実習とどうか、これら三つのものが一体のものを作つていかねばならない。ハードとソフトと研修をつつみこんだ言葉は「文化」しかない。こういう文化政策の主体というのは、文化行政ではお役所になる。しかし政策というのは、もう少し広くて、民間的なものも必要だ。さらに、個人レベルでも文化政策の担い手になれる。

こうなれば官も民もない。総力戦でいこう。こういう主体より、他には考えられないのではないかと。 (昭和五十一年三月五日、文化行政長期懇における発言を加筆訂正した)

* * *

お 願 い

文化庁広報誌「文化庁月報」を月号御愛読いただき厚く御礼申し上げます。
 本誌は、文化庁施設の正確な広報を目的として発行してまいりましたが、一般読者からの購読の御要望が多くなつてまいりましたので、これらに応えるべく市販をいたすことになりました。

そこで、今回定価一部一五〇円とし、株式会社ぎょうせいから毎月二十五日に発行することになりました。年間購読をご希望の方は、一、八〇〇円（千共）を添えてお申し込み下さい（申し込みは本誌そう入の振替用紙にて「ぎょうせい」あてお願いいたします）。

なお、内容については、よりいっそうの充実を図り、読み易く、かつ参考となるようにしていきたいと思っておりますので、なにとぞ引き続き本誌を御愛読賜るようお願い申し上げます。

昭和五十一年四月

文化庁
株式会社 ぎょうせい

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課
 TEL(〇三)二六八一二四一(代表)

「文化庁月報」 八月号

(通巻第九十五号)

昭和51年8月25日印刷・発行

編集 文化庁

住所 〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
 発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号
 営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (〇三) 二六八一二四一(代表)
 振替口座 東京 九一一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)

年間購読料 一、八〇〇円